

資料(16)

農青社「無政府主義研究」第一卷第一号(昭和七年一月発行)

目次

- 一 アナキズム運動に対する二、三の実見解
- 二 無政府主義緒論

アナキズム運動に対する二三の実見解(藤代高雄)

一 革命運動に対する無政府主義の役割

無政府共產主義は強権思想マルクス主義との激烈なる対立と同時に、一方実践的方面に於て無政府主義運動が大胆に行動されてい
た。世界の到る處、都市と農村、鉱山と漁村で支配者への叛逆が捲き起され、更に幾個處かに革命運動の炬火が挙げられたのである。
然し乍ら其等の革命運動が何故に反革命に終り第二第三の新しい支配者の手に奪略されたか？

本問題こそが世界に於ける全無政府主義者諸君が自から批判検討する可き任務である。

過去に於ける無政府主義者の行動及び其の役割と革命の方法等の究明、批判に依つて従来冒されて来た運動の誤謬認識不足等の自己
批判が成される事に依つて、今後に於ける無政府主義運動は正確な足どりを以て革命へ前進する事であろう。

無数の暴動は革命に先行し現れる處の前提的条件であり亦革命の導火線でもあり得る。ロシア革命、伊太利、支那、スペイン等の革
命運動に際して、常に革命運動の先頭に立ち既成権力たる支配階級を打倒した彼等は実に勇敢なるアナキストに外ならなかった。革
命の先頭に立ち既成権力を根底から覆し乍ら遂には多大の犠牲を以て奪還した民衆革命を第二第三の支配階級たる強権盲者共の為に掠
奪され呪わしい反革命に終結されねばならなかった？

『ロシアに於て強権主義者レーニン一流にしてやられ、イタリーも老エンリコ・マラテスタ等のアナキスト聯盟に依り遂行せん
とした革命運動主義もフアツシヨ巨頭のムツソリーニ一味の為反革命に終り、支那にあつては三民主義の巢窟と化し、最近のスペイン

革命も遂にあの共和党の為に中断されるに至った処に「此等の事実を基礎にして我が国の運動の情勢及び其の発展方向を分析して其の結果は、当然被圧迫民衆の内部に、アナキズム運動が徹底されていまいと云う結論に到達する。

永い強権搾取の麻薬に眠り込んでいた民衆を常に自由と平等の意識に甦らせたアナキズムの思想と大胆なるアナキストの行動とだ。あの幸徳事件、大杉事件を発端として、かのギロチン社事件を中心として果敢な自己犠牲的叛逆に依って権門盛家を夢みていた支配者群を戦慄せしめたと同時に、被圧迫民衆に対して解放運動の進むべき途が……言換れば如何なる方法と手段に寄るべきかを身で指示したものだ。

自己犠牲の斯る役割が解放運動に取って如何に重要かはすでに明かな事だ。

我々は更に重大な而も困難な役割が革命以前に為されねばならぬ行動が無数に存在している事を痛感するものだ。

此の重大な任務は革命に先立って農民の意志の中に、労働者の意志の中にアナキズムの思想を『地の底』に於て植付け、事である。

其は一人や二人の少数者の独自の行動（叛逆行為）としてではなく農民労働者の一員として被圧迫階級との密接な関連の下に行動——常に行為を以てして識らしめ、またボルの指導者や其れ等の理論に対しては常に民衆の側から強権主義の本体をバクロしてやる事だ。

特に農村に於てはこれ等は重要な事である。凡ての運動——行動が大衆から遊離した処の一切の行動は只自己陶醉行動以外の何物でもない。それは我々の為さんとする無政府革命を反動の手に渡すことに帰着するであろう。そうした事実は過去の運動に於て幾度となく繰返されたのを吾々は識る者だ。

安価な感傷を持って過去を眺めるのでなく過去の運動の誤謬と、時間的に相違した客観的事実に対する認識を批判し再吟味して『地の底』からの運動をだ。

吾々は民衆の中から黒色運動を起すに、二つの運動形態が不可避的に或る密接な関係の下に必要とされて来る。各村落、部落或は都市内部の小地区を中心として、あらゆる産業部門の中からの運動と共に、一方各地方との結合連絡がなされねばならぬ。此の連絡機関は特に運動を躍進せしめる二重の相互機能を持つものである（紙の上の連絡でなく革命的結合である）。

『地の底』民衆の中からの運動なくしては完全に無政府主義革命を民衆自身のもたらしめる事は不可能である。如何なる思想も大衆から遊離する時それは生ける屍の思想である。すべての機会をして吾々を工場へ、鉱山へ、農村へ、漁村へ、小売商人、俸給者へ、菌の如く散布せしめよ。これが現在の客観的情勢に対応せる運動の方向であり主要点である。

特に農村に於ける運動の場合では被圧迫農民と共に協議し行動する事が我等の重要な役割を果たす絶好の機会になり得るのであ

る。以上の如く吾々が農民の内部にあって、資本主義の本質、社会民主主義、強権労働共産党のマルクス主義をアバキ出して、民衆思想としてのアナキズムを彼等の言葉を以て伝へ革命の息吹きを喚起するのだ。

先づ一人の同志を作れ。一人の同志は更に一人の同志を求めて、革命的結合へ！

二 革命前に於ける無政府主義者の積極的役割

ここに言う『地の底』への運動とは単なる今まで述べられて来た積極的のそれではない。其は積極的行動としての運動形態だ。

今日のアナキストの行動の領域であって、極めて価値ある処の決定的な役割とは！ 労働組合、特に農民組合への吾々アナキストの取るべき戦術である。

最大の農民組合としての全国農民組合（全農）も今や農民の要求として『小作料マケロ』から漸次的に『土地を農民へ』と変わって来た。

全農内部でも確固たる勢力を有するに至った関東地方協議会（二府十二県）は独自の活動をなし東部勢力（労働大衆系）と対立して彼等（共産系）は『労働者農民の政府樹立』という強権主義のスローガンを都会工場労働者より階級意識の低いと称している農村へ宣揚するに至ったのである。

我々は先づ此の農民組合の内部に潜入する事だ。（之は筆者自身が戦いつつあるという自信と信念を以て立証するところのものだ）農民組合への行動は其が単に感情的な反感や社会運動を否定する為の公式的機械的な否定でなくて、我々はボルの重要な足場であると同時に、その根拠である処の組合の内部に喰入る。其に依って内部から彼等を叩き出すのだ。

初期に於けるフラクションの行動は極めて潜行的に運動を発展させるよう努力せねばならぬ。彼等の運動に参加していた青年の大部分はマルクス主義に依って直ちに理想郷が来るかに夢想しているのだ。

これは現実としての労働ロシヤの効果的な手品師共の雛形を鵜呑みにした結果である。その単純な然し急進的青年が多く、それで亦強権主義を憎悪している青年闘士が、無数にあるのを知るものだ。

其の場合我々はマルクス主義の誤謬を指摘し革命運動の本質を、とくと理解させなければならぬ。同時に俺達の出版物をどしどしと彼等を送り、此等の意識青年に無政府主義世界観を認識させる為に少数の座談会を持ち、かかる方法を漸次的に農民組合其の他の労働組合に働きかける一方組合運動の宣伝書記局の略取がなされる事だ。

彼等ボル運動の中心機関としてのアジ・プロ其他の連絡等の役割は書記局の任務で、俺達黒色潜入運動の深化と共にその書記局——プリント刷の機械、名簿等々——の略取！

これは農民組合運動全体に対してアナキズムを伝達せしめる事になる。だが此の行動は最大の決意と最大の慎重さを持ってしなけ

れば駄目になる。

亦一方ではボルの指導者及びその支持者に對立して運動方針の誤謬を指摘し、彼等の指令をして粉碎し、上から下へのピラミッド式委員制を完全に打壊せねばならぬのだ。斯くの如き行動形態で彼等強権主義者の踏台としての組合を内部から破壊すると同時に、全国に散在する同志との堅き連絡の下にアナキストがボル青年獲得の戦術として、今日多様な運動形態とし俺達が採る一つの方針ではないか？ 此等の積極的活動は只単に農民運動に対する戦術でなく、凡ゆる産業部門の労働組合に對しこの積極的運動の戦術である。

過去に於ける解放運動史上の民衆革命の幾多失敗は反革命分子——強権主義共產党、ファッショ反動思想——への無政府主義の立場より究明された民衆層への明確なる思想の昂揚がなされなかった事によるものではないか。

俺達は凡ゆる層への積極的に無政府主義を拡充す事によって、此の動揺した空氣を無政府革命に運ぶ事が可能であり、どうしてもそうせねばならぬことである。

革命に際しボル、反動ファッショ一派が民衆の前に独裁政治を宣言し、より強烈なる強権、支配をなさんとする時無政府主義思想を民衆のものたらしめよ！

農民自身の労働者自身のものたらしめよ！

アナキズムが民衆のものたる時彼等強権盲者共が如何に独裁を宣言しよう共それは直に抹殺されるであらう。

そして無政府社会建設の——革命の——ジャマ者として摘み出されるのだ。

其等の準備の為俺達は急がねばならぬ、準備が早ければ早い程、俺達の解放、俺達の革命が早いのだ。

されば思想を民衆へ。

民衆をアナキスト革命へ！

これ等凡ての企図は全国に散在せるアナキストの重要な今日の任務である。

(一九三一、一一、九)

無政府主義緒論 (武田俊市)

一、科学を否定する無政府主義

五、観念的傾向について 六、レニンのアナキと無政府主義のアナキ

四、クロボトキンの思想に対する修正

一 科学を否定する無政府主義

物体の温度が高まれば容積が膨張する、液体を熱すれば蒸発する。吾々はこうしたことを否定しようと言うのだろうか。いやそうでは無い。一般にこうした例えは物理現象は科学という名に於てよばれている。であるから、科学否定といえはこうした厳密なる視野に於ける争えない事実を否定するかの様に理解され易い。もとより、こうした物理現象には一定の法則がある。雨は雨自身の意志で空から降ってくるのではなく、何等かの天体現象に基づいて降雨することは論ずる余地がない。吾々はこうした自然界の厳たる法則をも否定するというのは無い。けれども、吾々が科学否定という時には恰もそうした事を抹殺するかの様に解釈されるのであるが、それは何うした訳である。それは、そうした自然現象について吾々の到達し得た智識は、飽くまで智識であつて科学はでないと言つたならば判るだらう。科学の内容は、即ち科学は、一般に把握しているように智識の集積でもなく智識の別語でもない。春夏秋冬の自然現象の説明でもない。そうした事をもそれに包含するけれども、それ自体ではなく、そうした智識を取捨撰択して資本主義に應用した有機的なブルジョア思想である。是は、吾々がこうした烙印を科学に内容づけるのでは無く科学者が科学に於て個々の智識の集積ではないから勿論還元できない。是は、吾々がこうした烙印を科学に内容づけるのでは無く科学者が科学に於て個々の智識の集積であるとして、一般民衆が却つてそうした科学者の科学に於て意図的に科学は智識の集積であると勝手に定義を下しているところから、吾々が科学否定と云えば智識を否定するかの様に解するところの矛盾が生れてくるのである。科学のこの本體を知るところが、吾々が科学否定と云えば重要なことであるか。アダム・スミスは分業を唱えた。分業によって生産を高めることは誰の為であつたらうか。ただ資本主義の隆盛の爲である。資本主義の爲めに要求されたことであり乍らそれが科学という名で呼ばれるところに恰も階級を超越した客観の様に聞える。而して資本主義の露骨な表現であることが隠され得る。科学が階級性を超越しているかのような外見が一般民衆をして科学に對する信頼の基となるのである。そして、科学に盲従せねばならぬという怖るべき觀念をあたえる。この觀念の養成が資本主義には全く必要である。で、現今科学時代だなど云つて民衆にいかにも社会は進歩したという錯覚を有たせるが其實、分業などで生涯ビンの頭をこすつていての労働者は決して愉快ではなく不幸であると思つてもそれを訴えることは冒険であると科学に盲

従して実は資本主義に利用されているのである。こうした科学の本体を振り出すことは非常に重大であるが、吾々は科学が資本主義の化身たることを民衆に知らせねばならないのである。而して、科学と智識の混同を警告せねばならぬ。凡そ、解放は吾等自身の解放が念願であって、自身を既に発生している一定の事態に適応させ隷属させることでは無い。資本主義を否定する者は、その哲学的基礎であるところの科学の本体を否定せねばならぬのは当然であって、科学が即物理学である、という種の憶断を下すことによって階級を超越する学問の様に考えたら大間違いである。科学は即物理学や地質学ではない。それ等を含むけれど其本体とする点はさきも述べたように、階級を超越する学問であるかの様な外見によって民衆を瞞着して科学に対する信頼を勝ちとり、科学への盲従を余儀なくさせる怖るべき毒害である。科学は人智の到達し得た最高でも何でも無い。その様な教育された迷信は捨てるべきである。現在、科学は客観でなく階級的に構成された『体系』であるのだ。

既に発生せるある事態は進歩せる人智の到達し得た結果であるとの信頼を有つ。それはなるほど人智の到達であるが然し、人智の到達せる結果は取捨撰択されて資本主義的に組み立てられていることを忘れていて、智識のすべてが現われているので無く、資本主義の露骨な有利のみが採択されているにすぎない。人智の人間中心の総合でなく、資本主義的按配であることを忘れていてからして現われている組織を人智の到達し得た合理的組織として認容するに至るのである。而して、進歩せる知識として謳歌するに至る。が、何ぞや、科学は人智の凝結ではなく、階級的意志から中立する物でなく、意識的に資本主義を擁護する哲学であつたのである。科学を基とする限り合理的に到達することは如何にしても不可能である。そういう意味で科学は人間を疎外している。

科学を否定せねばならぬ理由、及び科学を憶断的に信頼する結果が那邊に到達するか、その大体が説明され得たと思う。無政府主義は科学を否定する。それだから無政府主義はユートピアなのだという皮相な考えは今日以後一掃して貰いたい。諸氏の頭に潜在する科学の木偶の棒を片附けることが急務である。次にマルクスの社会科学を論ずるが、彼は矢張り科学が階級的意志から中立せるものとして考へた。物理学や植物学を見て科学の本体を突きとめなかつた。茲に全般的に社会科学を否定せねばならぬ根本が在るのであるが。

二 社会科学の限界

資本主義にとっては科学は合目的であるということとは科学によって組織された社会組織は不合理であるということに他ならぬ。が、科学に対する迷信を有っているマルクスはそれを悟ることが出来なかつたのは当然である。だからマルクスは資本主義の経済様式を見て人智の最高の進歩によって生れた高度の形態と見たのである。人類文化史に現われた様式のうち資本主義の経済様式をみて、最も発達をとげた最後の段階であるとの思想はマルクスを一貫する思想である。マルクスに於ては科学ということは人智の凝結の別語であつたのであるから、資本主義の経済様式を以て謳歌して止まぬことは必然であつて、科学の極致である資本主義の経済様式に対しては極度の信頼をもつものである。それに対しては何等の疑義が無いということはマルクスの出発である。

資本主義の経済様式というのは、大企業化と資本集中の二様相である。是をもつ人智の極致と為したマルクスは如何に社会学を把握したか、マルクスの社会学は、大企業化と集中の発展によって起る社会現象の考察という事へのみ限界されることが必然であつて、これマルクスの社会学の謂である。是がマルクスの社会学の根本であるから今一応繰返せば、資本主義の経済様式は人智の極致である、それに就ては何等の問題もない。であるから問題は、資本主義の経済様式たる大企業化と資本集中によって生まれる社会現象を把握することが目的であつて、大企業化と集中によって生ずる社会現象は自然発展であつて力学的機械的に展開して行くものであるから予定される物であり、この意味では必然的過程であつて、必然の意味に於て決定的であり、従つて是等の偶然性のない法則的なもの、即ち自然界の法則とひとしく科学、社会科学である主張しているのである。是がマルクスの全内容に他ならぬのであるが、マルクスの社会科学の出發が資本主義の経済様式の全的謳歌から出發していること、換言すれば資本主義の経済方式が人類智識の極致たる科学の上に組織されているとの觀念に立つことを知るのである。この場合マルクスは科学が階級的組織であることは何等の洞察も有らず頭から科学に盲信を払っているのであるが、盲信された科学は実に資本主義的科学にすぎないのである。科学から解放されなければならぬという事は重要な意味を有つものである。科学から解放され得ない者は、マルクスの様に資本主義の経済様式を以てて人智の最高と認識するに至るのである。であるから、前に述べた様にマルクスは大企業化資本集中によって生ずる社会現象を見ればよかった。それは一般に理解されている様に此発展と共に利潤生産は不能となりブルジョアは自己崩壊して政治経済のヘゲモニーはプロレタリアの党に移る。即ち利潤生産は終熄して生産の結果を国民に分配する社会主義国家が現われると言ふのである。この場合マルクスは云っている『資本主義は任意に崩壊するわけではなく最高の発展をとげたのちで無ければ崩壊しない』と。かく云うのは大企業集中化が極度に行われる最後の段階が来なければ自己崩壊作業が有り得ないというドグマで、また、そうで無ければ大企業集中化が完全した時でなければヘゲモニーを握ったプロレタリア党が企画経済が行えない。即ち社会主義は実現しない事を強く表明する思想である。実際、全産業が大企業化し中小工業が絶無になる時でなければ国家の統制下に嚴格に経済を置くことは事実上の問題として不可能である。然るに産業は飲食産業其他のごとく直接消費するものを生産する産業部門は主として大企業化集中化しないことは経済界の事実であり法則である。例えば紡績等は集中しても機業は大企業化しない。マルクスは中小企業の没落を夢見たがそれは実現しない空想である。従つて無数の中小企業が国家によって経営できると考へるのはユートピアであるから、中小企業は私企業となりブルジョア崩壊ののちロシアの如く単に国家資本主義の陣営に止ることが可能であるばかりである。これに就てロシアの現状を引例しつつ書きたいが到底紙面がゆるさないので本筋に戻つて再び社会科学にかへる。

資本主義の経済様式を以てて人智の到達せる最高となす社会科学は、ただ其経済事情発展によって生ずる社会現象を観察すればよかつた。これは自己崩壊であり自然発展である。此自然発展は『最高の発展をとげたのちで無ければ崩壊しない』(前掲)ことが生命で

ある。若し、そうで無く最高の発展の未然に於てブルジョアが崩壊する様なことが有れば別の何等かの事情があることになりマルクスの社会科学は何等の合規性のない観念的な把握に過ぎないものに終る。事実から遊離して、ただ、かくあらねばならぬという事の宣言であり社会学の鍵でも何でも無い。大本教の託宣のような無価値なものに終る。ところがロシアの様に数々の資本主義的先進国を置き去りにして『最高の発展』は愚か半封建主義の状態のままに『任意に崩壊』してしまった。双翼の鷲がマルクスの公式におかまい無く崩壊してしまつたことは誠に不都合であると言つて見たところが仕様が無い。茲に吾々が認識しなければならぬことは社会の変革、社会の大改造は決してマルクスの社会科学に拠るもので無いという確證である。されば社会の大改造は如何にして起るか。今日あつて明日の命なく国民の多数を占む無産の民衆が生活の不安窮乏に落され路頭に飢餓を叫び現社会に対する呪咀の叫びが結合し一団となつて其社会の支配者に対し種々なる直接の行動に出るからである。大企業化資本の集中による発展に依つて起るのではない。生ける生活の直面せる事実によつて烽起する所のものである。社会の変動はマルクス史観によるものではない。

然しながら無政府主義は此現象を単に把握する所の傍観主義ではない。社会の変革は、こうした生活の歴史に当面すれば必然に起る。必然には起るけれどそれは只変革が行われたという事実以外には何等の価値はないものである。次に現われるところの新社会に建設の明確なる社会概念が無ければ社会組織の本体は少しも変わらず依然たる貧困と支配の重圧があるばかりで全的解放は無い。無政府主義は破壊と建設の双方について明確なる思想をもつものである。プハリンが説明した様にマルクス主義に現われるところの社会は人の『欲すると欲せざる』とにかかわる所がない。それは前の説明で領ける。大企業化集中によつて現われる社会現象であつて民衆の意志から孤立せるものである。従つてマルクスに依れば、ある社会の出現が民衆の福祉にとつて合目的であるか、否かは問題の根本その物が間違つてゐる。この、民衆の意志でなく運命的に約束せられた社会の必然過程に対しマルクス派の中にあつても修正を為そうとする者が現われた。ベルンシュタイン、シュタムラー等々である。彼等は経済による必然過程に対し歪みをつけようと計つた。即ちマルクスの原因的史観に目的論的介入の挿入をはかつたのであるが、これはカントの倫理であつた。が、倫理である限り抽象的の所産で生物学には立脚しない。倫理は支配の哲学である。それは人類を解放しない。が、兎も角、没価値的なマルクスの没価値的力学体系に対し、マルクス自身の陣営から幾多の抗議があることを記せば足りる。

社会科学は没価値であつて解放の學問では無く、学自体としても成立し得ないことを知る可きである。基本は人間疎外にある。

三 唯物論か弁証法か

宗教及び倫理の基礎は観念論である。観念論者にはまず啓示がある。唯物論にはまず現実がある。無政府主義はその何れをも採らない。観念論は一切の事実を抜きにして実証も可能もへちまも無い。観念論の論理は、神は在り故に存在す、に他ならない。それは何処からであるかは判明しないが兎も角ある観念の先入があつて、事実がそれに符合するかしないか問題では無く其先入主に対し狂熱的な

信仰が有るばかりである。それと共に唯物論には先づ現実がある。唯物論にあつては理想は空想と同義語である。それは既に発生せるある事態の他は、認識することができない現実主義である。飛躍に対して常に難癖をつけようと準備している。

オスト・ワルドが観念論者であつてもいい、マルクスが唯物論者であつてもいい。『唯物論も観念論も畢竟は同一物である』無政府主義は、盲目的に教義の擁護に専念する莫迦げた観念論も、現実硬著した進歩を阻害する現実主義も共に吾が基調では無い。唯物論も観念論も共に支配の哲学である。では無政府主義は何であるか。無政府主義は生物学に立脚する理想主義である。では、無政府主義は如何に生物学に立脚するか。それは次章に於て述べる所だ。

ザインカゾルレンか、即ち物質あつての精神か観念の所産か。問題が茲に限定せられるなら勿論当然物質あつての精神である。事物は観念の以前に在る。が、マルクスは唯物論として生産様式の自然過程によつて現われた必然社会への個人の服属と把握している。

四 クロボトキンの思想に対する修正

無政府主義は観念論でも唯物論でも無い。では無政府主義は何に立脚するか。吾が無政府主義は生物学に立脚する普遍的理想主義である。だから革命は必然である。ではいかに生物学に立脚するか。これが前章で投げかけられた疑問である。即ち、無政府主義の基調の問題である。

『アナキーは自然の秩序である』とはクロボトキンの一齣であるが、クロの述べたように人類は先験的にアナキーを実践的に意欲するか何うか。クロの理解するところによれば人類は倫理的に生れついで特殊の生物でもあるかの様に把握されねばならぬ。然しながら人類もまた動物界の一動物に過ぎぬ。即ち吾々の理解によれば動物と等しく人類に有るものは『生きんとする本能』が唯一的に存在することを認識することを認識する以外に倫理的に生れついでいる物とは考えられない。吾々は人類についての観察にオプチミズムな倫理的特性を包擁せしめては考えることが出来ない。人間の性質は善でも悪でもない、有るものは悉くの動物に共通なる『生存の本能』のみであると考えてゐるのであつて、此意味に於てはクロボトキンの思想に修正を加うるものである。少くともクロは相互扶助を本能として説いてゐるのであつて、其処に生れて来る結論はどうかと言へば『権力を××させればそれで凡ゆる人々が直ちに兄弟の様に愛し合い他の利害を自己の利害の如く欲する』ところの理想郷が来ることに結論されざるを得ないのであるが、之は民衆を徳性に於てのみ見ようとした自己撞著であつて革命はしかく単純には行かない事は吾等の認識である。従来の無政府主義はクロボトキンの此思想に漫然たる追隨を示し、その為は無政府主義をして若干の理想郷として一般に受取らしむることになつたのである。吾々が現実を見るならば農民の間に於ける私有財産の観念が如何に根強き生活感情（外来的であるにせよ）であるかを知るだらう。吾々はこうした事実を注視する時、共産の爲の闘争で無く私有のための闘争に没頭してゐる農村を眼前に見てコミニニズムが自然の秩序であり革命さえ行われるなら社会はアナキーへ行くと云ふ風なオプチミズムを毫末を有つことは出来ないのである。

かくのごとく吾々はクロボトキンの思想のように人類を徳性なるものとして見る事が出来ない。生きとし生ける者の一切の絶対なる観念を『生きんとする本能』に於て把握するものであって、吾々に従えば相互扶助も相互闘争も生存本能に基づく手段のひとつの現われであるとして理解するのである。それが手段であり得る場合には如何なる手段をでも生存本能を全うする為には採るであらう。是が生物の唯一の本能である、本能なるが故に是は何を以てするも過ぎる事は不可能である。即ち、クロが一方的に徳性に於て見たものを吾々は生物学的に生きんとする本能を以て絶対の者と為した。若し徳性に於て見るならば、人類がしかく倫理的特性を有つものなるに於ては教育に依つて社会は改造され得る訳であつて是はユートピア社会主義であると言われねばならぬ。即ち、相互扶助に於て見るのは生物学の歪曲であつて生存本能を把握することが人間性を疎外しない生物学的見地に立つ事である。この意味に於てクロボトキンの思想を修正せねばならず従つては是より展開される無政府主義の説明に別個な展開を行わねばならない。

其社会組織の如何によつては相互闘争は避けられない。それは生存する為の手段であるからである。今日の社会に於ては闘争は生存の武器である。好むと好まざるに拘らず闘争事実は決定的な社会必然である。農民は決して隣人の豊作を心から祝うことは無い、養蚕を始める前には必らず各戸にかけ引が行われる。という闘争事実によらなければ生活は奪われる。灌漑の爲めに村同志の争事は絶えない。是等の一切の事実は何を物語っているものであるか。言うまでも無く其社会組織の如何によつては相互闘争は必然であるという事、徳性に非ずして生存本能であるということの事実である。然しながら、相互闘争は生存を全うする為の手段であつたけれど其結果は逆に生存を破壊する原因となるものでしか無いという経験が人類に知られた。生存闘争は善でも亦悪でもない、のだ、それは生存を破壊する逆結果を生むものなることを認識せざるを得ないのである。闘争の跡には生存の壊滅、悲慘、困憊があつて、福祉と進歩は全く見られない。若し其社会が相互闘争を必要とせず人類の幸福を約束する相互扶助と連帯のみが發展し得る社会組織の社会であるならば、吾人の生存意欲は傷つけられることなく充分に満足させられる筈であるという所に無政府主義の誕生があるのである。即ち無政府主義の発生は生存本能の満足の為の一定の社会組織を社会形態として把握せんとする努力であり、善悪の倫理の観念若しくはマルクスに於ける経済関係による社会必然とは全く異なつて生存本能の完行を目的とする生物学に依拠するものである。以上によつて大体無政府の立脚が理解されたものと思う。であるから無政府主義に於ては生存の充足の為の一定の社会形態の把握が重要な意義を有つのである。この社会形態は「無政府コミュニンの小社会制」——マルクスの大社会概念に對比し——の概念である。而して現社会から新社会へ変革する手段として直接的収用×命を行うことを方法とするものであるが、それに就ては茲では語らない。無政府主義は常に民衆運動を目指す、無政府コミュニンに社会目的として宣言せる民衆運動の新しい動向の峰起を起こすのでなければアナキスト革命は失敗である。それは当然であつてかかる社会概念の把握なければ、社会目的なければ失敗である。無政府主義に於ては無政府コミュニンの思想が民衆のうちに大なる拡充を有つことが問題である。

社会秩序を維持する上には特殊の権力が必要であるとの観念は集産経済（農工の分業及大企業生産経済）の大社会に於ては統制と管理の手段として生れるが、それは必然の理由がある。一小地理的区画、経済的に見れば工業農村たる小農工社会が社会の単位である無政府主義社会に於ては、事物は分業では無く分担即ち協働のもとに行われ得る規模社会であつて権力の如き何等の支配体の必要が無い。コミュニンは自由の母である。アナキは決して無政府状態の混乱や生活に於けるエゴイズムを指さすものでない事、それ等はいわゆる『自由意志』であつて『自由』を意味しない。自由意志即ちエゴの虜囚はアナキの概念とは何の関連もないものである。

五 観念的傾向について

クロボトキンの思想について修正を行つた結果、無政府コミュニンの社会概念が民衆へ拡がりを有つことが、解放を決定する要因なることを認識する無政府主義は、この社会概念を把握せる民衆×起によつて革命を行うほかに方法はない。無政府主義運動は此動向にむかつて行われねばならぬことは言を俟たない。

然るに今日の民衆の把握は民衆の想像する様な社会が自由ソヴィエトによつて招来できるものと考へている。彼等は強権圧政に対しては反抗するけれども資本家政府を倒せばプロレタリア・デモクラシーは樹立できる物と仮想し、それによつて社会の自由が招来できるものと考へている。而して、都会と農村とのいわゆる社会分業が行われる其社会には何等かのフアシズムによつて強力に統制するに非ざれば社会が成立し得ない、経済から来る必然を知らない。民衆はロシヤに於けるシエレー（疎状価格差）の問題も、強力なる統制が忽ち民衆を蹂躪して圧政の府となることも知らない。亦、その事を知る者は党あるいはフアツシヨの独裁が社会現象として当然なりとの見地に立っているのである。この民衆の自然発生的な把握の現実を吾々は一九二一年に於けるクロンスタットの暴動に於て見た。即ち彼等——革命的民衆であつてボルの支配に対し反抗した人類の戦士であるクロンスタットの水兵や労働者——は何を要求したか。『権力をソヴィエトへ』なるアンチ・ボルシェヴィキの「自由ソヴィエト」の樹立によつて自由共産の社会を招来しようとしたでは無いか。が、其社会認識は如何に認識不足を示しているか。即ち民衆の自然発生的思想は単にアナキスチックの限界に止る以上でなく、『アナキ』を可能にする小社会の概念を知らない。その結果は何も得るところは無いのである。

吾々は是を知るが故にさきにパンと自由社より『最近運動に於ける組織についての一提案』を刊行するに至つた。結成主義はその理論的陣立てに於ていかに弄言するとも実践に於ては組織への人員の獲得以外では無いことを明らかにしたのであつて、労働組合に於ては獲得量が比較的多く思想団体にあつては厳正であるだけの相違なることを指摘し、思想の拡充は是等組織への部分的獲得でなく比較にならぬ程広汎に在るところの全民衆への拡充を計るところの手段を採らねばならぬことを訴へたものであつた。無政府主義自体は当然可能であるけれども其実現の可能は別な問題がある。社会科学は経済関係による自然必然であるが無政府主義は決して決定的必然の社会過程では無く（アナキズム史観的には必然であつても）、さきにも述べたように民衆全民蜂起の核となる時にのみ実現の可能があ

る。この意味ではマルクスの決定論に対して必然的実践理想主義と名付けることが当を得ている。無政府主義の実現の可能についてバクニンは言う『歴史は抽象的な個人によってでは無く活動せる生ける、そして過ぎ去る個人によって作られる。抽象は真実の生ける人間の生ける人間によって荷われる時にのみ前進する。』無政府主義は解放を可能にする概念である。バクニンのいわば抽象に相当する。無政府主義が如何に正しくあっても『生ける活動せる人間によって』荷われなければ一歩も進むものではない。吾々の主目的は無政府主義の教義の教壇的擁護では無い、それを実践することによってコンミュンを実現することである。然るにアナキストの一部(多くは)存在的である。吾々は此現状を批判せねばならぬ。

これに対し五つの答を挙げたならばよかるうか。革命の熱情を失った為、運動の方法を見出し得ない為、(農村に於けるアナキズム運動にあつては農村青年社の『如何に為すべきか』、都会に於いては種々の合法の出版物によって其方法を見出して頂きたい。)

『能力に応じて主義』に落ちた為(革命家は自己の境遇にその物を運動が必要とする立場に意識的に置いてこそ全能を傾けての運動がある。撰択的に能力に應じてなどと言うのは手ぬるい言分である。)結成主義の誤謬に陥り組織体なくしては活動が出来ないと誤信し自主行動を把握しない為に起る停頓、而して最後に観念的傾向による阻害の以上五つの原因によるものであるが、最後の観念的傾向について批判したいと思う。

バクニンは観念的理想主義に就て言う『かれ等の全哲学は次のように言える。それは感情の哲学であつて真の思想の哲学ではない。それは一種の形似上学的敬虔主義である。』その論者の理想は何処から生れるか。『奇蹟的に啓示された真理のそれでも無ければ厳格に科学に立証された真理のそれでも無い。かれ等は少しばかりのエセ哲学の理論の上に基礎づけ大部分を漠然たる宗教的信仰の上に而して同じく大部分を観念的に抽象的に詩的な感情の上に基礎づけているのである』云々。実践理想主義と観念主義の差はどこにあるか。それはバクニンは明徹にも述べた様に、実践理想主義は『否定から出発する、故にそれは理想を行かねばならぬ。観念論は肯定から出発する、それ故其は教義の擁護に終る。』バクニンは是についてローマとギリシア文明の差異をあげて観念論は必然に支配の教義となることを証明しているのである。ローマはそれである。肯定から出発する者は革命学では無い、理想への努力は無い、ただ抽象的に自己の教義の擁護がある、先入主によって他を批判する、白眼視がある『観念の勝利について非常に嫉妬深く其が為には彼等は生ける現実の人間の自由に対し若しくは苦悩に対しても感ずる心の余地をもたず、観念の先人は遂に人間愛の源泉なる溫柔な心ともっとも同情に充ちた心情とを乾からびさしてしまふ』英雄主義的となった観念理想主義は、必然に平凡で当前のありふれた一般民衆へ関心を失わしめることは必然であつて、民衆は愚であるとの一言によって貴重なる民衆との間に好んで遊離を作る。吾を高しとして独善となり他に対しては支配的とならざるを得ない。『一言にして云えば』とバクニンは続ける『諸君は常に理想主義者(概念論者)が実践的には唯物主義の行動をなせるを見出し他面には唯物主義者(実践理想主義)がもっとも壮大な理想的憧憬と理想的思想とを追

求し且実現しつつあるのを見るであらう』が、それはもとより当り前で、現実の否定より出発する実践理想主義には変革による理想の追求が焦燥されるに反し、観念に於てのみ把握された肯定はただ教義の擁護に終わり、生活事実は理想が高ければ高いほど乱雑となる。理想は高い。故に現実の乱雑は許さる可きだ。是が其実践であるという事をバクニンは説いたのである。(注、平凡社版社会思想全集第二十八巻、バクニン『神と国家』八太丹三訳参照)無政府主義は観念の擁護運動ではない。現実の否定から出発する実践の革命運動によって新社会の建設をはかる実践主義であつて、無政府主義の戦線は決して観念的傾向に陥ってはならぬものである。

六 レニンのアナキと無政府主義のアナキ

これは過程を通じてのアナキかアナキズムのアナキかの論であるが、紙面の都合で他日述べることにする。
甚だ雑ばく乍ら緒論を終わる。諸兄の御叱正を乞う。(完)